

## 終わりが見えてきた教員生活?!

嶺井正也

大学教員生活は 36 年目に突入した 2012 年度。私は初めての経験を三つもした。その時かなりのショックを受けたのだが、よく考えてみれば驚くに値しないのかも知れない。時代が変わってことだけかも知れない。

1947 年 5 月生まれの私は今年 65 歳の誕生日を迎えた。定年まであと 5 年ちょっととなった。風貌はもちろん、老人のそれらしくなっている。

このところ担当している専修大学経営学部の入門ゼミナールの時間であった。まさに今風の若い女性の恰好し、話し方をする女子学生に「先生、可愛い」と言われてしまったのである。どんな場面でのことであったか、はや記憶にはないのであるが、この風貌の私が「可愛い?!」と言われたことにショックを受けてしまったのである。「この私が可愛い」なんて・・・

考えてみれば「好々爺」という存在になってしまったのかもしれない。それにしても 35 年以上の教員生活のなかで初めての経験であり、驚きを隠せなかった。

次は長年担当している教養ゼミナールの合宿時のこと。

一日目の飲み会のあと、「今日の二次会はどうする?」とゼミ長に聞いたところ、「明日の予定があるので 21 時までに終わるようにお願いします」と言われてしまったのである。これまでだと、ほとんど徹夜状態で飲んで話す学生たちに「無理しないように」と注意するのが教員の役目だったのに・・・ 私は早めにホテルの部屋に入ったゼミ生たちとわかれ、一人赤提灯ののれんをくぐったのである（ホテルのいくつかの部屋では遅くまで起きてゲームなどしてはいたようであるが）。

二日目の夜。学生たちは定食をたべ、私はビールとおつまみ。もちろん、二次会へと学生を誘う勇気はなかった。ホテルへ向かう道すがら、ある学生が「夏休みが長すぎて退屈なんです。短くしてもらえませんか。その代わりに、週の授業日を 4 日くらいにしてもらいたいのです」と。他の一人も大きくなづいていた。私はまたしてもショックを受けた。「夏休みが長すぎる!？」

最近、授業時数確保でどの大学もかつてよりは夏休みの日数が減っているはずである。だから学生から詰問されるとしたら「どうして夏休みが短くなるんですか」と。その予想は見事に外れてしまった。

「教員生活が終わりに近づいているみたいだ」と、私はつぶやき、また一人赤提灯に誘い込まれてしまった。